

國學院大學學術情報リポジトリ

『夜の寢覚』 末尾欠巻部分をめぐって：
最新の二断簡の解釈を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大槻, 福子, Otsuki, Fukuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000485

『夜の寢覚』 末尾欠巻部分をめぐって

— 最新の二断簡の解釈を中心に —

大槻福子

はじめに

中間・末尾部分に多くの脱落を有する『夜の寢覚』については、改作本・絵巻詞書・拾遺百番歌合・風葉和歌集など様々な資料を用いて、そのストーリーの復元が試みられてきた。中間欠巻部分に関しては、改作本と大筋で同じであると推定で諸説ほぼ一致するものの、改作本と筋が大きく乖離する末尾欠巻部分をめぐっては、意見が大きく分かれ、その復元はまだ緒に付いたばかりと言っても過言ではあるまい。また近年多くその

存在が紹介されている「寢覚切」についても、どこまでそれを『夜の寢覚』のものと認めるべきかという問題を措いては復元作業を進めることが困難であり、末尾欠巻部分復元をめぐる問題はますます複雑化しつつあると言えよう。

しかし、全体を失った散逸物語とは異なり、この物語は多くの部分が残存していることから、その現存部分を詳細に再検討することで、物語がその終末部分に向けてどのように進もうとしているのかを、ある程度は読み取ることが可能でもあろうし、その作業無くして新出の「寢覚切」を筆写者や形体の上のみから機械的に『夜の寢覚』の一部と認め、現存部との内容的なつ

ながりについての検討が不十分なまま、当該切部分のみの、あるいは「ツレ」とされる他の切との間のみでの復元作業を進めることは、一つ間違えば物語の全体像を見誤る事にもつながりかねないものであろう。

新出の切の存在が次々に指摘されることで研究も新たな段階に進んだ現在、復元作業において重要なのは、現存部分から窺われる物語の方向性と新出の切の内容との関わりをどう捉えるのか、さらには風葉集など、寢覚の欠巻部資料であることが確実な資料の内容と新出切の内容とがどう結びつくのかを見極めることなのではなからうか。

本稿ではそうした観点から、実践女子大蔵の伝後光厳院筆切、及び一昨年その存在が明らかにされた伝慈円筆切の解釈を中心に、物語現存部や他の資料との関わりから、末尾欠巻部分の内容について改めて考察を加えてみたい。

一、末尾欠巻部における実践女子大学蔵伝後光厳院筆切の位置付け

横井氏は、『夜の寢覚』末尾欠巻部の出現―伝後光厳院筆物語切の正体―^③において、新たに実践女子大の所蔵となった切

(以下実践女子大切) についての翻刻と詳細な紹介をされた。その翻刻を以下に引用させて戴く。

しらさりしやまちの月をひとりみて

よになき身や思ひいつらんとのみななめ

いりたまふに女三宮いとうつくしうもの

おもひしりおよすけ給つ、は、の女御の

御ことおほしいつるなめりおほとかにうちなか

めいて、つゆけ、なる御袖の気色もいみ

しくらうたけなるにかくこそはたれも

おほしいつらめと思ひやるにさへいと、ななめ

いつるにつけてもなつかしくうちかたらひ

かゝる人もおはせさらましかはとおもふにも

この切については、冒頭の歌が『拾遺百番歌合(以下歌合)』や『風葉和歌集(以下風葉集)』、さらに『夜寢覚抜書(以下抜書)』所載の和歌と一致することから、『夜の寢覚』のものであることが確認されており、しかも上記三資料に含まれない『夜の寢覚』原文をも有するという点で、極めて価値の高いものである。

この切の内容については、中川照将氏が座談会「夜の寢覚」において述べられたように、まさこが北山に籠ったことを聞いた寢覚上が、我が子の母を思う気持ちに思いを致し、また目の前にいる女三宮が悩んでいる様子であるのを見て、この方も母の事を思い出しているのだらうと推察する場面、と見るのが良いであろうが、他の資料の内容との関連も含め、今少し詳しく検討を加えることにする。

当該切と同一の歌を有する資料とその本文は以下の通りである。

・歌合^⑤

① 右大将、三ゐの中将ときこえし、きたやまにこもりぬと
つたへき、て

しらざりしやまべの月をひとり見て世になき身とやお
もひいづらむ（八番右）

・風葉集^⑦

② 世になきさまに聞えてのち、右大将北山にこもりとつた
へききて、月のあかりける夜、ながむらんおもかげもみ
るこちして思ひやられければ

ねざめの広沢の准后

・拔書^⑧

しらざりし山べの月をひとりみて世になき身とや思ひ
いづらむ（一二七〇番）

③ あはれ我を思いづる人もあらむかし。三位中将山ふかくあ
とをたちたえこもりたるらむ□しのほどよ。いかでゆめ
□うちにも、□くてあるぞとしらせてしがな。おさなき人
のさま／＼恋しさなど、身をせむるやうに、いとたへがた
□にも、ものおもふ秋はあまたへにしかど、いとかくしも
は、おほえざりきかし。

しほれわびわがふるさとのおぎの葉にみだるとつげよ
あきのゆふかせ

しらざりし山ぢの月をひとりみて世になき身とやおも
ひいづらむ

実践女子大にも含め、四資料に収載される「しらざりし…」
歌については、その詠まれた場所に関する記述がないが、抜書
においてその直前に「しほれわび…」歌が記載されていること
が手掛かりとなる。「しほれわび…」歌については、歌合の九
番右詞書に

④しらかはの院にて、身のありさまおほしつゝくるゆふぐれに

とあり、また風葉集二二九番詞書にも

⑤しのびてしらかはの院に侍りけるに、もの思ふあきはあまたありしかど、いとかくはあらざりきかしとながめわびて

とあることから、場所は「白河院」であることが確定しており、抜書ではそれに続いて記されている「しらざりし」歌についても、同じ場で詠まれたものと考えて良さそうであるが、横井氏はこの事について、「従来の『白河院』の位置づけは再検討しなければならぬ」のか、あるいは風葉集や歌合に「我々には捕足できぬ省略」があるのか、との疑問を呈しておられる。

白河院の詳細については次節で詳しく述べるとして、ここでは上記資料の「しほれわび」歌と「しらざりし」歌との間に時間的・状況的懸隔が存在するか否かを検討しておきたい。風葉集⑤では、「しほれわび」歌の詞書に「もの思ふあきはあらざりきかし」という寢覚上の思いが記されており、抜書③にも同歌の直前に「ものおもふ秋はくおほえざりきかし」と類似の表

現が見られることから、抜書に見られる数行の文章は「しほれわび」歌の直前にあった物語本文との推測が可能であろう。したがって、この抜書の一続きの文章は、白河院での寢覚上の思いであると考えられる。抜書では「しほれわび」歌と「しらざりし」歌が並べられているが、物語原文に両歌が続けて記されていたとは考えにくく、間に幾分かの地の文の省略は想定されるが、注目すべきは、抜書に記された文章と「しらざりし」歌との間に共通する寢覚上の心情であろう。抜書にある「あはれ我を思いづる人もあらむかし」との寢覚上の思いは、まさに「しらざりし」歌の下句「世になき身とやおもひいづらむ（傍点をたちたえこもりたるらむ心□しのほどよ）」は同歌の上の句の心情へとつながるものである。したがって、「しほれわび」「しらざりし」両歌の詠まれた時期は相当近接するものと見て良いのではなからうか。

さらに、実践女子大の文章もその手掛かりとなる。女三宮が母女御を思い涙を流すのを見て、「かくこそはたれもおほしいつらめ」と思う寢覚上の心情も、やはり抜書に見える「あはれ我を思いづる人もあらむかし」との思いがあればこそ「たれも」という表現であろうと考えられ、抜書に記された文章と

の関連性が感じられるものである。また、両歌の詠まれた時間にも注目すれば、いずれも秋で、前者は「ゆふぐれ」(歌合④)に、また後者は「月のあかりける」(風葉集②)時に詠んだものであるから、前述の心情的な共通性も併せ考えれば、同じ日の夕暮から夜にかけての時間であったと考えても、矛盾はないように思うが、たとえ日の隔たりがあっても数日のことで、その間に寢覚上の心情や環境に変化があったものとは考えにくく、両歌の間に「補足できぬ省略」があった痕跡も認められない。したがって、実践女子大切の場面も、白河院におけるものと解して良いであろう。

二、白河院における寢覚上

では、末尾欠巻部分において、「白河院」はどのような場所であったのだろうか。『夜の寢覚』現存部分には白河院に関する記述が一切見られないことから、欠巻部分諸資料に頼るしかないのだが、前掲部分以外では、

・拾遺百番歌合

⑥しらかはの院より、あながちにのがれいでたまへるを、は

じめてきかせ給て、つかはしける御ふみに(傍線稿者、以下同然)

中宮

見しま、のゆめのうちにぞまどはる、たちをくれにし
みをうらみつ、(一五番右)

⑦院の御けしきよろしからで、女宮ぐしたてまつりて、れぜい院にわたらせたまひにけるのち、右大将しらかはの院にまいりて、むなしくたちかへるとて、「わたくしにだにわすれたまふなよ」と侍ければ
女三宮の中納言

あらしふくあさぢがすゑのしらつゆのきえかへりても
いつかわすれむ(一三番右)

・伝慈円筆寢覚物語切(以下、物語切)

⑧…し□かはの院にわかれいでしゆふべに、「あさぢがすゑに」といひし中納言のきみ、さとにいでたりととき、給て、うちしのびたづねおはしたるを…

の三箇所在白河院についての記述がある。このうち歌合⑦・物語切⑧、および従来から知られている『寢覚物語絵巻』詞書第二段をも含めた諸資料からは、寢覚上の幽閑だけでなく、女三宮が一時白河院に住まい、その折まさこ(右大将)との恋愛関

係があり、何らかの原因で女三宮の父・冷泉院の怒りを買って引き離されたのであろうということが推定されており、「まさこ勘当事件」と呼ばれている。歌合④・風葉集⑤の詞書からは、前述のように寢覚上が一時白河院に滞在していたことも知られるのだが、諸説の多くは白河院に寢覚上が幽閉されていたとの推定は行いつつも、同じ白河院に居た女三宮や、そこに通っていたはずのまさこの接点をどう考えるかについては触れていない。稿者は、かつて女三宮の許に通っていたまさこが、白河院で偶然母を発見し、寢覚上の脱出に協力した可能性に言及したが、その時点では女三宮が白河院に住んでいた時期と寢覚上幽閉の時期とが重なることを示す資料が存在しなかった。しかし実践女子大の発見により、その時期が重なっていたことが明らかになったのである。当該切の内容をより詳細に検討するため、現代語訳を付すことにする。

しらざりし…(我が子は、まだ経験したことのない山住みしながら一人月を眺め、私のことを、もうこの世にいないものとして思い出しているのか)とばかり(寢覚上は)詠んで、月をじっと見つめておられるが、(目の前にいる)女三宮はたいそう愛らしく、次第に大人

になって物事についての理解も深まってこられた様子で、母である女御の御事を思い出しておいでなのだろう、おつとりと空の月を見つめて、涙に濡れた御袖の様子もたいそう可憐なので、寢覚上は「こんなふうに、誰も母親を思い出しておられるのだなあ」と(我が子にも)思いをはせるにつけ、ますます月を見つめて物思いに沈むのだが、それにしても、こうして心通わせて話の出来る人もおいでにならなかつたとしたら(私はどんなに苦しいことだろう)と思うにつけて…

右の内容からまず分かるのは、白河院で幽閉されていた寢覚上と、院の愛娘である女三宮との間に交流があったことである。女三宮の母である承香殿の女御は、当初帝(冷泉院)から「私物に心苦しうおぼしとどめられ(巻一・新編日本古典文学全集二二頁。以下現存部からの引用は同書による)」る存在であったが、内侍督人内後に寵愛の衰えをを恨んだ文を帝に送って(巻三二四六頁)後、実家に下がった(三〇九頁)由で、その後少なくとも現存部では宮中に戻った記述が無い。現存部分でわずかに触れられていた程度の、読者の印象にさして残らなかつたとおぼしき出来事が、実はこの場面の伏線ともなっていたこ

とには注目すべきであろう。もし女三宮が、こうした母を恋慕う思いを抱いていなければ、寢覚上と宮との交流は上辺だけのもので終わったかも知れないが、母を思い出して悲しむ女三宮であればこそ、母を慕い続けているに違いない我が息子を思う寢覚上との心が、真実通じ合っていたことを窺わせるのがこの場面なのである。「なつかしくうちかたらひ」以下からは、幽閉中の寢覚上の心を慰める唯一の存在がこの女三宮であったことが推察されるのだが、この資料から明らかになるのはそれほどばかりではない。

前掲風葉集②の「しらざりし」歌についての詞書に、「世になきさまに聞えてのち」とあることと併せ考えれば、この切に書かれた文章は所謂「寢覚上偽死事件」が起きてからの出来事であったということになるのだが、「偽死事件」後の寢覚上が白河院に「しのびて」（風葉集⑤）住んでおり、息子にも自らの生存を知らせることが出来ずにいたのに、冷泉院鍾愛の女三宮は彼女の生存を知っていたばかりか、寢覚上と親しく交流していたのである。この事実をどう考えれば良いのであろうか。

従来の復元の多くは、「寢覚上偽死事件」について、幽閉されていた白河院脱出のために寢覚上が死を装ったものと解していたのだが、それは抜書③の存在が明らかになる以前の資料を

基にしたものであった。前節で検討したように、③に記された和歌二首を手掛かりに、歌合①④、風葉集②⑤を併せ考えれば、寢覚上偽死事件は少なくとも白河院脱出のためでなかったものと判断して差し支えあるまい。また、実践女子大切には前述のように女三宮との交流があることや、歌合⑥に「しらかはの院より、あながちにのがれいで」とあることからすれば、どこか別の場所⁽¹⁾で幽閉されていた寢覚上が、死を装って脱出後に、自ら進んで白河院に身を隠したとも考えられないのである。

稿者は以前、冷泉院が寢覚上の死を装うことで周囲を騙し、彼女を幽閉したのが「寢覚上偽死事件」であろうと推定したが、この新出の切の内容からもそうした推定に沿って考えれば、説明ができるのではなからうか。

前述のように、寢覚上は世間には死亡と思われながら、白河院で生存していたのだが、それを世間はおろか、我が子にも知らせることが叶わなかった。寢覚上が何とか我が子にだけは生存を知らせたいと思っていたことは、前節で検討した諸資料から明らかであるにも関わらず、それを阻むものは何だったのだろうか。白河院は無人の廃屋などではなく、女三宮も住んでいることから考えれば、まさに冷泉院の管理下にある建物であったと見て良いであろう。そして、院鍾愛の女三宮が住む以上、

その世話をする乳母や女房たちも大勢仕えていたはずである。皇女が、そこにいる誰だかわからぬ女性と親しく交流を持つことを、周囲の女房たちが認めるはずはない。女三宮に対しては、一時的には例えは乳母の遠縁の女性であるとか、適当に言い繕うことはあったにせよ、少なくとも主だった女房達は、寝覚上の素性を知っていたと考えるのが自然であろう。

以上の事を考えれば、寝覚上が生存して白河院に居ることを、冷泉院が知らないと考える方がむしろ不自然であり、院が寝覚上をここに幽閉していたのだと考えるのが合理的ではあるまいか。寝覚上が生存を知らせることが出来なかった理由についても、幽閉中であるなら外部との連絡は絶たれているのが当然であり、彼女が「死亡」とされた原因についても、院の関与が強く疑われる。

院が寝覚上を幽閉したのは、彼女と「いま一度の逢瀬を、いかでかならず(巻五・五一頁)」との思いが昂じたものだろう。現存部巻四で、寝覚上との逢瀬を内大臣に阻まれた冷泉院は、寝覚上と暮らすためには寝覚上を世間から、とりわけ内大臣の目から隠す必要があった筈である。内大臣は現存部巻五で、寝覚上を広沢まで追いかけて、その出家を阻止するなど、冷泉院に劣らない寝覚上への執着を見せており、院に対する警戒心も隠

さなかつた。並大抵の手段では内大臣の追跡を振り切る事が困難であったことは想像に難くない。寝覚上がある日突然失踪すれば、内大臣だけでなく、成長したまきこも、何としてでも寝覚上を探し出そうとするであろうし、一番に疑われるのは冷泉院であろう。しかし何らかの手段で、内大臣達に寝覚上死亡と信じさせることができれば、院が自らの許に寝覚上をとどめおくことが可能になる。帝が、夫のある女性を自らのものにするために幽閉という手段を用いた例が『石清水』『しのびね』等の中世王朝物語にも見られることは以前にも述べたが、そうした例の嚆矢として、この『夜の寝覚』が考えられるのではないかと思う。院が退位後の住まいとした冷泉院ではなく、白河院に幽閉したのは、より人目の少ないであろう白河院に隠すことで、寝覚上の生存を完全に秘したいとの思惑によるものではあるまいか。ただ、常の住まいでない筈の白河院に、冷泉院が頻繁に出入りしたり、滞在しようとするなら、それなりの口実が必要になる。女三宮の白河院滞在は、そうした口実として使われていた可能性が考えられるだろう。

「死亡」とされ、外界との連絡手段を断られた寝覚上の寂しき、辛さを紛らわすには、話し相手が必要であったろう。折しも、白河院には女三宮がいた。かつて寝覚上と再会した石山の姫君

が「親などはおぼえたまはず、思ふさまに、うつくしき御遊びがたきとさへ思ひ陸れ馴れきこえ(巻四・四〇一頁)」たように、女三宮にとつても「遊びがたき」であつたのかもしれない。冷泉院の寵愛を失つて内裏を去つた母に会えぬ寂しさを紛らわすための相手を求めるのは、むしろ自然なことである。寢覚上も女三宮も、冷泉院の自分勝手な行動に振り回され、恋しい肉親に逢うことが叶わないという点で、まさに類似の境遇だったのである。

そうした二人の間には、ただ同じ場所に暮らしているというだけではない、より深い心の通じ合いがあつたことを、実践女子大切からは読み取り得るが、そこに寢覚上脱出の契機を見出すことが可能なのではなからうか。寢覚上は協力者がいないままでは、白河院からの脱出はおろか、外界との接触も断たれた状態から抜け出すことが出来なかつたはずである。周囲はずべて院の息のかかつた人ばかりであるから、秘密が洩れるはずもないのだが、前述のように、まさこが通つていた女三宮は、寢覚上の身内との唯一の接点であつたろう。この新出切の内容からは、この時点で既に女三宮とまさことの間に交際があつたかは不明であるが、最終的には女三宮がまさこに協力すること、寢覚上との再会が叶つたのではなからうか。

三、新出伝慈円筆切の解釈―寢覚上の白河院脱出事件と女三宮との接点

なお稿者は、女三宮が寢覚上に関する情報をまさこへの愛情ゆえに進んでもたらしたものかと想像していたのだが、一昨年田中登氏によりその存在が明らかにされた^[5]最新の伝慈円筆切を見ると、まさこが寢覚上らしき女性の姿を発見した方が先であるらしく、その人のことを女三宮に尋ねている場面と思しき内容が描かれている。その文章は以下の通りである。

申さむかたなければ御心もゆるされてふと申
いてんもいと、は、かりあれは心はたれか侍らむこ
とくしき、はの人はおもふによに侍らしとこたへ
申給へはかのもやにあやしうそらめにやあらむ
めつらしきさましたる人のふと見えつるはとの
給ま、になみたのさしくみ給をされはよといみ
しういとをしければことくしきこえまさきは
してやみたまひぬとはせむさいくうに御たいめ
むありて心よりほかになからへすこすやうに侍

れと、をさかりまかるま、にもいふかひなうなく
 さめらるゝ時のさ(私注「ま」の誤写か)もなくいよ／＼
 心にも、おほ
 えまさられ侍れはかくてもいとながらへにくゝ
 のとやかにをこなひのかたにおもふきぬへくおもひ

田中氏はこの前半について、真砂が「寢覚上に面会を申し入れた」ものの、寢覚上からは「しかるべき身分の人は、ここにはいらつしやいません」と否定され、真砂はなおも「あの母屋のところ、不思議なことに私の見間違いでしょうか、尼姿の方をお見かけしましたが」と食い下がったものの、寢覚上は「言葉をお濁してその場を済ました」という内容であると解されている。

この切の時間的位置づけについては、田中氏が述べておられる通り、「けだかく、しうとくなるさましたり」で始まる物語⁽¹⁶⁾切から「いくほども経ずして」のこと―すなわち、まさこが寢覚上と思しき女性を偶然見かけた場面の後と考えて良いであろうが、当該部分の田中氏の解釈については以下のような疑問が残る。

① 寢覚上があくまでまさこに自身の存在を秘匿するつもり

なら、まさこが「面会を申し入れた」折に、なぜ寢覚上自身が(人を介したにせよ)発覚のリスクを冒してまでわざわざ対応し、存在を否定したのであるうか。最初から周囲の女房のみで対応し、否定させれば済むことではないだろうか。

② 「めづらしきさま」を「尼姿」と解されているが、稿者が

新編日本古典文学全集に収載される中古・中世の作品における用例を調べたところでは、「めづらしきさま」は「めつたにないほど美しい、素晴らしい、喜ばしい」あるいは「めつたにない・珍しい」人や物の形容として、あるいは「めつたにない・珍らしい」人や物の慶事、という意味であろう)等について用いられる表現であつて、出家姿や尼姿についての用例は認められない。念のため「めづらしき人」「めづらしき姿」等についても調査したが、同様である。そもそも、尼姿は本来「めづらし」といった肯定的な捉え方をされるものではないことを考えれば、むしろその人が尼姿ではなかった故に、まさこはこうした表現を用いたのではなからうか。

稿者は、この前半の文章は女三宮の許に通つていたまさこが寢覚上らしき人を目撃して後、女三宮にその女性が寢覚上かと

うかを確かめようとするものの、宮は真実を告げ得ずにはぐらかしてしまふ、という内容なのではないかと考えている。以下に当該文章の私解を示す。

(女三宮は) 申し上げようもないので、(まさこが相手では) 御心がゆるんで、つい(真実を) 口に出してしまふようなことがあると、ひどく差し障りがあるので、「ここに⁽¹⁸⁾ いたいどなたがおりましよう、身分の高い人は、私が思いますが、けつしてここにはおりませんまい」とお答え申し上げなされると、(まさこは) 「あの母屋で、私の妙な見間違いだっただけでしょうか、珍しい様子の人が、不意に見えたのは」とおっしゃるや、涙ぐまれたのを、(女三宮は) 「やはりそうだったのか(お気づきになったのか)」とひどく困ったので、別の話にそらして紛らわし、その話を終えてしまわれた。一方、殿(男君) は前齋宮にお目にかかり、「(私は) 不本意ながらも俗世で生きながらえているようではございませんが、(寢覚上が) 亡くなって月日が経つにつれても、不甲斐ないことに、心の慰められる折とてなく、ますますわが心には恋しさがつのるばかりでございますので、このままこの世でなごらえるのも難しく、心安らかに仏道に入つてしまいたいとも思ひい…」

この対面の場所は、寢覚上が幽閉され、かつ女三宮が滞在していた白河院と考えると良いであろう。訳中の「珍しい様子の人」とは、「珍しいほど」美しいの意味に加え、長く会えないでいたことを響かせた表現で、母・寢覚上のことをほのめかしているのではないかと思われるが、あるいはこの時既に懐妊中であつた可能性も考えられる。続いて後半の「とのせせむさいくう」以下の部分には、この院に内大臣、すなわちまさこの父も来ており、前齋宮に対面した上で、寢覚上死後の自らの苦衷を語ると思ふ様子が描かれる。述べたように、白河院で幽閉中の寢覚上をまさこが発見した条が「けだかく、しうとくなるさましたり」に始まる物語切であるとするなら、まさこは早速その事を内大臣に告げ、ともに確認のため白河院を訪れたのである。内大臣も、自らの苦衷を訴えるのが真の目的ではなく、寢覚上が本当は生きてここにいるのではないか、それを探るために前齋宮に面会した可能性を考えざるべきであろう。残念ながら、前齋宮がどのように応対したのか不明であるが、年若い女三宮ですら隠し通そうとしたこの件について、そう簡単に真実を告げることは無かつたのではなからうか。

中世王朝物語「むぐら」⁽¹⁹⁾の例等から考えれば、仮に女三宮が、最初から冷泉院による寢覚上取り籠めを知っていた、或いは気

づいていたにしても、それをまさこに告げることは相当勇気の要ることであつたらう。ここでまさこから尋ねられて、すぐに真実を教えなかったとしても、無理からぬことである。しかし一方で、宮は寢覚上の心も理解し、交際相手であるまさこの思いも痛いほど分かつていたはずであるから、このままいつまでも隠し通したとも考え難い。また、内大臣にもまさこから寢覚上目撃情報が伝えられていたとすると、隠し通すにも自ずと限界があつたであらう。

この最新の伝慈円筆切の内容も踏まえて、寢覚上の白河院幽閉から脱出へのおおよその流れを推定すれば、次のようになるうか。

死亡とされ、白河院に幽閉されていた寢覚上だが、我が子に生存を知らせる術もなく、そこに住む女三宮との交流を通じて、かろうじて心を慰めていた。やがて女三宮の許に通い出したまさこが、母の姿を偶然見かけ、女三宮に母と申しきその女性について尋ねるも、一旦ははぐらかされる。しかしやがて女三宮が隠しきれずにまさこに真実を告げ、再会が叶った。まさこは白河院脱出を助ける。

まさこと女三宮の仲を知った冷泉院が激怒し、二人の仲を裂いたことは既に資料から知られているところであり、その怒りの

背景がまさこと女三宮の恋愛そのものではなく、白河院からの脱出にあつたのではないかと稿者は以前に推定したのだが、実践女子大蔵の切に加え、田中氏の新出の伝慈円筆切が相次いで紹介されたことで、そのアウトラインが次第に明らかになってきたように思う。

おわりに

実践女子大切には、白河院幽閉中の寢覚上が院鍾愛の女三宮と親しく対面し、宮が母を恋う思いに、我が子らの思いを重ねる姿が描かれていた。さらには、この宮との交流が、幽閉中の寢覚上の唯一の慰めであつたらしいことも綴られている。

従来 of 復元では、まさこ・女三宮の恋と寢覚上幽閉は切り離して考えられがちであつたが、実践女子大切からは女三宮が単なる「まさこの恋人」としての位置付けではなかつたことが分かる。そうした女三宮と寢覚上との関わりは、ひいては後の「まさこ勘当事件」がやはり寢覚上と無関係に起きたものではなかつたことをも示唆しており、従来は独立しているように考えられてきた個々の事件が、実は深い関連性を持つて末尾欠巻部分の内容を構成していたであろうことを窺わせるものである。

また、物語現存部中にさりげなく僅かに触れられていた、女三宮の母・承香殿の女御が帝（冷泉院）の厚き寵愛を失って失意のうちに宮中を去ったという出来事は、実はこの切に描かれた場面の伏線ともなっていたことが知られるのである。

さらに、最新の伝慈円筆物語切には、寢覚上だと思われる姿を目撃したまさことが、女三宮に確かめようとするも、宮は自身が真実を漏らした場合の影響を考え、辛いながらも何とかはくらかず、と思しき場面が描かれる。

従来、ともすれば途中からの主題変更であるとか、書き進めて行くうちの物語としての破綻、といった捉え方がなされてきたこの物語であるが、これらを見る限りでは、むしろ逆に作者の緊密な構成意識が窺われる。こうした意識がここだけにとどまるものでないことは、以前の拙稿で述べた通りである。『夜の寢覚』は、発端部の予言に始まり、その最終部に到るまで周到に構成を練った上で書かれた物語だったのではなからうか。我々はこうした視点から、今一度現存部分を、さらには欠巻部分の資料との関係を見直す必要があるように思う。そうした見直しが、末尾欠巻部分を含めた『夜の寢覚』の全体像把握へとつながるものとなるに違いない。

注

- (1) 伝慈円筆切・伝後光厳院切・夜寝覚抜書等の資料の存在が明らかに以前には「寢覚物語全釈」・岩波古典大系「夜の寢覚」・日本古典文学全集「夜の寢覚」・校注「夜半の寢覚」(一九八一年 武蔵野書院)などに末尾欠巻部分の内容について詳細に述べられており、以後のものとしては田中登氏による復元『寢覚物語欠巻部資料集成』二〇〇二年 風間書房) など多くの論が発表されている。諸論の詳細については栗山元子氏「夜の寢覚」・『果守』の古筆切を巡る研究史」(『考えるシリーズⅡ』①知の発見 王朝文学の古筆切を考える―残欠の触発』所収・二〇一四年 武蔵野書院刊) 参照。
- (2) 横井孝氏「夜の寢覚」末尾欠巻部の出現―伝後光厳院筆物語切の正体―(注1「王朝物語の古筆切を考える」所収)に寢覚切についてまとめられており、その後久保木秀夫氏(『武蔵野文学』二〇一四増刊春号「寢覚める古筆切」所収「座談会 夜の寢覚」)により、伝後光厳院筆切の「ツレ」とされる切の存在も示されている。
- (3) 筆跡・紙の質・字数・行数の一致或いは類似のみを根拠として、複数の切を「ツレ」と認めることの危険性については、拙稿「『夜の寢覚』末尾欠巻部分と伝後光厳院筆切」(注1「王朝物語の古筆切を考える」所収)において述べた。
- (4) 注2参照。
- (5) 以下、注2「寢覚める古筆切」所収座談会一九頁における中川氏の発言を稿者が要約した。
- (6) 「拾遺百番歌合」からの引用は『日本古典文学影印叢刊』による。なお、句読点濁点等は稿者。以下同然。
- (7) 以下「風葉和歌集」からの引用はCD-ROM版「新編国歌大観」所収本文による。
- (8) 『寢覚物語欠巻部資料集成』(注1参照) 一九四頁。以下「抜書」から

の引用は同書による。

(9) 注2論二五頁。

(10) 注8書二〇二頁。

(11) 拙著『夜の寢覚』の構造と方法 (二〇一一年笠間書院刊) 五六頁。

(12) 注11書五四頁他。

(13) 田中登氏は、二〇一七年九月、神戸松蔭女子大学において「伝慈円筆『寢覚物語』切の出現」と題する口頭発表で新出の物語切についての報告を行われて後、当該切に関する論文「伝慈円筆『寢覚物語』切の出現―「斎宮」再考―」(『国文学』一〇二号、二〇一八年三月)を發表されている。

(14) 田中登氏は寢覚上の第二子について一貫して「真砂」の表記を使用されているので、本稿においても田中氏の論からの引用および要約に関する部分については、「真砂」の表記を用いることとする。

(15) 注13論文八四頁。

(16) 注8書二〇一頁。但し稿者は前稿までに述べた通り、この時点で寢覚上は在俗で、場所は白河院であると推定している。田中氏は注13論文八三頁において、ここでの寢覚上を尼姿であるとすると根拠の一つとして『浜松中納言物語』の尼姫君についての描写の類似性を指摘し、「うつくしげ」「うちそばみて」「つらつき」「かたはらめ」等の用語の共通性を新たに挙げられたが、それらは尼姿でなくとも女性の美しさを表現するのに用いられる常套的な表現であり、特に『浜松中納言物語』のこの場面に限ってのことではない。また、『浜松中納言物語』で「ゆらゆらとそぎかけられて」と描写されている尼姫君の髪は、「額髪」ではない。「ゆらゆら」する長さの額髪は、むしろ在俗の場合であることは、以前拙稿(注11書)で指摘した通りである。従って、『浜松中納言物語』との類似性を根拠に、ここでの寢覚上を尼姿と判断するにはやはり無理があると考ええる。

(17) Japan Knowledgeにおける「日本古典文学全集」の検索機能を使用。

(18) 物語切の「心は」に当たる部分であるが、「心は」では意味が通じない。

元は「心には」とあったものが、「心」の字の崩し「心」が「ろ」と誤写され、それに「心」の字が当てられたものであろうか。仮に「心には」として解釈する。なお、田中氏は注13論文において「心、は」とあったものが、「心、ろは」と誤写をし、そしてある段階で「心は」と漢字が当てられるようになったのではないかと推測されている。

(19) 「むぐら」では、妹である春宮御息所を訪問中の女君が、雪により足止めされた所へ帝が闖入し、そのまま取り籠めるという事件が描かれるが、本来なら姉を助けるべき春宮女御は帝の意を汲み、このことが男君に知れぬように隠蔽しようとする。詳細については注11書の七三〜七五頁参照。

(20) 注11書五五〜五九頁。

(21) 注11書第七章「寢覚上の宿命」参照。